第 772 号 平成21年 9 月20日発行（毎月20日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日　第三種郵便物認可

2009 年（平成 21 年）
9 月号（No. 772）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部　150 円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

「涸沢フェスティバル」の3日間にみる若い人たちの多様化した山の楽しみ方

神長幹雄

北アルプスの穂高・涸沢を舞台に、9月4日から6日まで、「安全登山」と「エコロジー」をテーマにした「涸沢フェスティバル」というイベントが開催された。最近、若い人たちの山への関心が高まっていると言われるが、実際、その3日間は若い人たちで大変なにぎわいだった。象徴的な事象とも思われるので、その現状をレポートしよう。

横尾谷の広い河原から、やがてシラビソやコメツガの樹林帯のなかを登り、涸沢へのほぼ中間点、本谷橋に出た。登山者にはなじみの場所である。川にはコンパクトな吊り橋が架かり、さらに上流に小さな橋もでき、河原は格好の休息ポイントになっている。

その河原がこの日は様相を一変させていた。20代から30代にかけての若い人たち、それも男女のペアや女性だけの2人連れ、3人連れなど、どれも少人数のグループばかりだった。30人以上はいただろう。彼らのいずれもが、まだ山を始めたばかりか、始めて数年しかたっていない初心者のように見えた。登山のスタイルは異なるが、私にはすごく懐かしく感じられた。なにしろ、30年以上前は、山は若い人たちばかりの世界だった。

30年前にタイムスリップしてしまったような感じだが、まぎれもなく2009年9月4日のことである。この日から3日間、北アルプスの涸沢を舞台に「涸沢フェスティバル」が開催され、そのイベントに参加する若い人たちだった。

1980年代の中ごろから、中高年の登山ブームが話題になってきたように思う。登山用具が格段に進歩し、アプローチが短縮され、山小屋が近代化されてきたことで、経験や体力のない中高年の初心者でも山を楽しめるようになってきた。そこに深田久弥の『日本百名山』が注目を浴び、ブームに拍車をかけることになる。一部の先鋭的な登山を除いて、低山から高峰まで中高年の登山者たちに席巻されてしまった感さえあった。そうしたブームを敏感に反応してか、ここ10年くらいは、若い人たちが

涸沢の朝の大気のもと、大好評だった「山ヨガ」（写真はすべて加戸昭太郎氏）

目　次

「涸沢フェスティバル」の3日間にみる若い人たちの多様化した山の楽しみ方‥ 1
首都圏の「支部化」第2段階へ 多摩・埼玉支部設立の準備‥‥ 4
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 5
イタリア山岳博物館を訪ねて
奥飛騨西茂住の凡兆岩見聞記
若年層対策に一提案
世界遺産キナバル山頂へ
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 8
集会委員会／山の自然学研究会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
越後支部
追悼　川喜田二郎氏‥‥‥‥‥‥‥ 11
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
INFORMATION‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
山の博物館訪問‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
植村冒険館

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ‥‥‥‥‥‥ 10～20時
水・金 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 13～20時
第2、第4土曜日 ‥‥‥‥‥ 閉室
第1、第3、第5土曜日 ‥‥ 10～18時

山から遠ざかってしまった。彼らは社会の中核を担わされ、仕事に忙殺されて、山どころではなかったこともあるだろう。

しかし、この数年は様相が異なってきた。まず屋久島にその徴候が現われたと思う。30代の女性たちを中心に、屋久島に一種のブームが起こったのだ。「世界自然遺産」というブランドに加え、森のもつ神秘性や「癒し」の感覚が、彼女たちの好奇心を刺激した。そして、やがて富士山へと舞台が広がっていった。

夏の富士山は登る山ではないと思っていた私が、3年前の夏、それこそ二十数年ぶりに夏の富士山に登った。ゴミ拾いのイベントに参加するためであったが、あまりの光景にビックリしてしまった。若い人たちが、列を作って富士山を登っていたのだ。翌年も夏に出かけたが、その数は前年より確実に増えていた。そして今年は24万人もの人たちが夏の富士山に登った。その半数以上が、若い人たちのはずである。

20代や30代の若い人たちの自然回帰や山への志向が肌で感じられるようになってきた。地球温暖化やエコロジーなど、地球や自然に対する関心が高まってきたころでもあった。中高年登山ブームが長く続いた登山界だが、屋久島や富士山の動向からもわかるように、30代を中心とした若年層が目につくようになってきた。彼らの多くは、環境教育のなかで育ち、特にエコロジーに関心をもつようになっていた。ところが、実際には具体的にどう山とつきあえばいいのか、わからない人たちが大半だったと思う。

そうした状況のもと、昨年、日本登山史の発祥の地とも言える北アルプスの涸沢周辺で、日本で初めての山の祭典「涸沢フェスティバル」が計画された。素晴らしい涸沢カールを舞台に「美しい自然を次世代へ」というテーマをかかげ、具体的には「エコロジー」と「安全登山」に関する催しが企画されたのである。涸沢ヒュッテや涸沢小屋、稜線の穂高岳山荘や北穂岳小屋の協力のもとに、環境省松本自然環境事務所、松本市、信濃毎日新聞社の後援と登山用具メーカーの協賛を得て、山と溪谷社が、未組織の若い人たちに雑誌とネットで参加を呼びかけた企画だった。

今年はその2回目である。昨年の成功をさらに「進化」と「深化」させるべく、涸沢を主会場に、徳沢と横尾をサブ会場にして、9月4日から6日まで3日間のイベントとなった。冒頭の本谷橋のシーンは、その入山時の光景である。こうした光景は、この3日間、ルート上のいたる所で見受けられた。上高地のバス停に若い人たちがあふれ、徳沢や横尾を若い人たちが列を作って歩き、そして涸沢のキャンプ場に200張り近いテントが出現した。

イベント自体は、手作りの素朴なものだったが、どのイベントにも参加者たちの明るい笑顔があった。今年は幸い、4日のオープニングを除いて、終始、天候には恵まれた。6時間の歩行の末に、涸沢の自然のなかに実際に身をおいてもらおうという試みは大成功であった。

3日間のイベントをざっと紹介しよう。まずオープニングのセレモニーののち、「カフェ・カラサワ」と称して、各小屋に期間限定のカフェメニューを用意してもらった。夕方にかけてヒュッテや小屋で、登山家の谷口けいさんの講演、気象予報士の村山貢司さんの山の天気講座、山岳写真家の渡辺幸雄さんの写真講座などが行なわれ、ヒュッテの食堂では涸沢国際映画祭が開かれた。これは毎年カナダで開かれるバンフ国際山岳映画祭出典映画のなかから涸沢フェスにふさわしい作品を特別上映するというもので、今年は、カナダの野生オオカミと女性研究者のふれ合いを描いた『Serching for the Coast Wolves』だった。そして初日のメインである「キャンドル・ナイト」へ。ヒュッテや小屋など4軒の山

2日目の夜、涸沢小屋のテラスで上映された涸沢国際映画祭

小屋の協力で、参加者全員のカウントダウンとともに、発電機を同時に停止させるというものだ。もちろん非常灯も消す。それぞれのテラスに置かれた250本のキャンドルが幻想的な山の夜を演出する。さらに数分後、そのキャンドルも消された。10分あまりの間、電気のまったくない涸沢の漆黒の闇を充分体感することができた。

2日目は願ってもない快晴。6時すぎ、専門講師による涸沢カールの朝の空気を全身で感じてもらう「山ヨガ」から始まる。その後、奥穂高や北穂高へ登る登山教室が開かれ、参加メーカー11社によるブーステント村が開村。環境省松本環境事務所の大坪三好さんのエコツアー、山岳ガイドの黒澤徹さんの初心者のための公開登山講座、涸沢小屋の谷剛士さんによるボルダリング教室などが行なわれた。昼過ぎはヒュッテのテラスで参加メーカー8社による「ファンクション・ファッションショー」。機能性を重視し、なおファッション性に富んだ最新ウェアを、ヒュッテや小屋のアルバイトの人にモデルになってもらい紹介された。ヒュッテの食堂では「遭難救助の世界」と題して、ヘリ・レスキューの先駆者、遭難者救出中に亡くなった篠原秋彦さんの映画が上映された。続いてテラスでは漫画『岳』の作者、石塚真一さんが漫画制作におけるエピソードを講演してくれた。石丸哲也さんのネイチャー公開講座、田部井淳子さんのトークショーが続き、小屋ではテラスを使って、再度、涸沢映画祭と盛りだくさんの内容だった。

3日目も雲ひとつない快晴。朝の山ヨガに始まり、メーカー各社協賛の登山用具をプレゼントする山じゃんけん大会とゴミ拾いですべてのイベントが終わった。

おしゃれなファッションショーも行なわれた

「いままで山の中でこのようなイベントがなかったので、とてもよかった。特にキャンドル・ナイトは最高でした」（29歳・女性）

そうしたコメントがいくつも寄せられた。総じて「とても楽しかった」「来年もぜひ来たい」という声も多数聞かれた。

まだ今年の参加者の集計はできていないというが、5日夜の宿泊者数はヒュッテが370人、小屋120人、テント190張りで大盛況だった。しかもそのうち6割以上が若い人たちだった。昨年の統計では事前登録者115名（ちなみに今年は618名）のうち30歳代が51パーセント、20代も入れると62パーセント、登山歴も3年未満の初心者が45パーセントを占めていた。

上高地から6時間かけて自分の力で登ってきた若い人たち。彼らの世代は、もの心ついたときからIT機器が氾濫していた。周囲にはIT機器が氾濫していた。ワープロ、パソコン、ケータイ、ゲーム、そのどれをとっても簡単に「バーチャル」の世界を体験できた世代だろう。しかし、簡単に疑似体験できればできるほど、「リアル」な実体に惹かれるのではないか――。彼らは「汗をかくことに躊躇していなかった。

かつては「最もダサイ」と言われた登山も、彼らにとっては「おしゃれ」で抵抗感がない。彼女たちの多くは、カラフルなレギンス（タイツ）に巻きスカートをはき、おしゃれなTシャツにストール（襟巻き）、そしてつば広の帽子といったいでたちで、まるで雑誌のグラビアから出てきたようだった。快晴の涸沢で、山に登るわけでもなく、小さなアルコールコンロでコーヒーを沸かし、ゆったりとした時間を過ごしていた。

もちろん、こうした若い人たちがそのまま日本の登山界を背負っていくとは思えない。ムードやファッションばかりが先行しているといった危惧を抱く人もいる。しかし、中高年の独壇場だった登山界に、若い人たちが入ってきた意味はあると思う。まだまだたとえ一部だとしても、そうした志向は確実に育っているような気がする。

当日は少数派になった中高年の人たちも、そんな若い人たちと一緒にイベントを楽しんでいた。まさに世代を超えて楽しめるのが、山であることを痛感した3日間であった。

トピックス

首都圏の「支部化」第二段階へ
多摩・埼玉支部設立の準備

副会長　神崎忠男

日本山岳会の百周年を機に首都圏支部化のプロジェクトが組まれ、支部設立の作業がすすめられてきた。2007年には栃木、茨城、千葉にそれぞれの支部が設立され、順調な支部活動のなかで会員参画によい結果が報告されている。しかし、東京都内、神奈川、埼玉、群馬には残念ながら支部がない。そうしたなか、東京の多摩地区と埼玉県に住んでいる会員のあいだで、それぞれに支部設立の具体的な作業がはじまった。

多摩地区在住会員を対象に２度の会合がもたれた

先般の日本山岳会21年度総会で確認された在籍会員総数は531名である。このうち全28支部に在籍されている会員（支部会員）はざっと3000名で、支部に所属していない会員が2300名余いることになる。25年前の創立80周年の時から、日本山岳会は「地方の時代、支部の時代」と唱えてきたが、組織全体としての方針決定や具体的な取り組みに遅れをとっていたことは否めない。しかしここ2、3年前からの総会の事業報告をみても、支部活動の著しい躍進がうかがわれる。各支部のご努力のおかげである。

会員に山岳会を身近に感じてもらい、クラブライフを楽しんでもらえる環境づくりを目的に、東京・市ヶ谷の本部ルームが利用しやすい首都圏でも、支部化推進の機運が高まっている。

多摩地区の在住会員は426名、埼玉県は297名である。その会員たちが、「自分たちのために自分たちでつくる支部」をモットーに、支部設立の準備に入っている。

多摩では7月11日、多摩地区在住会員（八王子や立川、武蔵野、府中、町田などを含む広範な地域）に呼びかけ、56名が集まって懇談会を開いた。9月5日、八王子市民会館で開いた2回目には86名が集まった。このあと設立準備委員会を発足させ、3回目を11月7日に立川市民会館で予定している。より多くの会員の参画と理解、協力のなかで、来年の2月を目標に多摩支部（仮称）設立総会開催の準備を整えているのが現状だ。

また、埼玉県在住会員の支部化準備も進んでいる。すでに、準備委員会といってよいグループが動いており、11月に埼玉県在住会員の集い（懇談会）を行なう予定である。

全国各地に支部を設け、すべての会員に支部に所属してもらうことが日本山岳会の描く将来（基本）構想である。ただし、支部会員になることを決して強制するものでないことを前提に、全国的な支部網づくりを進めていることをご理解いただきたい。支部に所属したくない会員まで強制的に加わってもらおうとは思っていない。あくまでも会員一人ひとりの意思を尊重し、ご理解を得ながら、首都圏でも支部化を推進していきたいと考えている。

各支部が活性化するなかで日本山岳会の真価が高まり、社会、登山界からも期待、信頼される組織となること、また支部の仲間たちとのクラブライフをベースに会員としての充足感が高まる支部事業が推進できればと考えている。

会員各位のご理解、ご協力をお願いしたい。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

イタリア山岳博物館を訪ねて

芳賀孝郎

6月26日、ミラノ北西120キロのスイスに近いラヴェノの町よりイタリア国鉄に乗りトリノへ向かった。途中ノヴァラで乗り換え、穀倉地帯のロンバルディア平原を走る列車に乗る。車窓からの風景は麦畑の彼方にアルプスの峰々が連なって見える。しばらくするとイタリア国鉄のきれいとはいえないガラス窓からの景色が変わり始めた。青々とした水田の広がりが見えた。畦の所どころにポプラが並木になっている。水田の遠くには白く大きく見えるモンテローザを中央に連なるアルプスの山並みが見えた。

ポー河流域の豊かな水を利用して耕された稲作地帯を眺めていると、しばしの間信州の大糸線に乗って安曇野平野を走りながら後立山連峰を見ている思いになったり、学生時代に見たイタリア映画『にがい米』を思い出したりした。列車がトリノ近くになると水田地帯に工場や家が建ち始めてくる。古い落ち着いたトリノ駅に到着した。

今回の案内役は、山仲間の谷泰氏（現在イタリア在住・AACK1962年サルトロカンリ隊員）である。イタリア山岳会トリノ支部を訪ねたところトリノの聖人の祝日で休みであった。駅から南へ2キロ歩き、ポー河を渡って100メートルほどの丘の上にある寺院に隣接したイタリア国立山岳博物館を訪ねた。館長は不在であったが、受付の女性職員は私たちを親切に温かく迎えてくれた。まず案内された屋上からは、アルプス連峰21度の大パノラマであった。特にポー河に沿って立ち並んだ調和したレンガ色の建物を前景としたアルプスの姿は荘厳であった。

山岳博物館から望むトリノの町並みとアルプス（画・芳賀淳子）

館内を案内され、イタリア山岳史の展示を見た。特にアブルッツィ侯の北極探検・カラコルム・バルトロ氷河の正面に聳える峻峰ガッシャーブルムⅣ初登頂などの記録はその当時の装備・登山道具等とともに展示され、大きなスペースをとっていた。アブルッツィ侯遠征隊に参加した登山家であり写真家であるビットリオ・セラの探検トロ山塊の写真はいつ見ても素晴らしい。

1909年、アブルッツィ侯隊はチョゴリザに2回にわたり登攀し、7498メートルまで達した。家・登山家としてのアブルッツィ侯の偉業が偲ばれる。谷氏の説明で、この山岳博物館はアブルッツィ侯記念国立山岳博物館であることを知らされた。

イタリア登山隊はカラコラム・バルトロ山塊のパイオニアである。アブルッツィ侯隊のK2、チョゴリザの試登に始まり、1954年、K2の初登頂、1958年、バルトロ氷河の正面に聳える峻峰ガッシャーブルムⅣ初登頂などの記録を残している。1958年、AACKチョゴリザ隊はアブルッツィ侯隊の登山記録をも参考にした。このチョゴリザBCでは、GⅣ隊のフィスコ・マライーニ、ボナッテイら4人と交歓し、チョゴリザで遭難したヘルマン・ブールのテント内で見つけた遺品をボナッテイに手渡した。それも51年前のことである。

博物館のテラスからもトリノの街とアルプスが一望できた。その眺めは大町の山岳博物館から見る大町市街と鹿島槍を中心とした後立山の風景と重なった。

今回の旅でボナッテイとポデスタ夫人には残念ながらお会いすることが出来なかった。しかし谷氏の流暢なイタリア語と豊かな知識のお陰で伝統あるイタリア登山界の一部分を見ることが出来たことと、イタリアのこの地域の風景と信州・安曇野の風景が似ていることを知り感嘆し感謝している。

奥飛騨西茂住の凡兆岩見聞記

西山秀夫

昨年は飛騨の山に登ることたびたびであった。ガイドブックの取材で旧神岡町の大洞山に登山して、ふっと閃いたことがあった。俳人の前田普羅が句集『飛騨紬』に詠んでいたことを思い出したのである。

普羅と飛騨の関わりを調べると『日本風景論』第六版を15歳前後で読んで、表紙に描かれた高原川の峡谷を脳裏に刻んでいた。

調べが進むと小島烏水や田部重治の著作に影響を受けているような気がした。烏水の『アルピニストの手記』（平凡社ライブラリー）を取り寄せて、目次を見てあっと思った。中西舗土『評伝前田普羅』で読んだ凡兆岩のことが書いてあるではないか。

実は烏水も『日本風景論』第六版を読んで飛騨に憧れていたのだ。飛騨への傾倒ぶりは数回に及ぶ登山が物語る。この時、凡兆岩があることも知らずに通過したことを後悔して書いたものだった。普羅は昭和6年に訪ねたが、烏水は現地へは行かず資料だけで書いた。昭和11年とある。

私が行ったのはこの7月である。国道41号から橋を渡り、高原川左岸の西茂住に行く。左折して新猪谷ダム堰堤まで走る。そこが車止めであり、あとは北陸電力の巡視路を辿ること10分余りで凡兆岩に着く。しかし、右は急俊な山裾であり、左はダム湖である。山崩れ箇所もあり大変危険も多い。

背丈以上もある自然石の露頭に「わしの巣の樟のかれ枝に日は入ぬ　凡兆」と彫られた句碑だった。猿蓑に入集された名句である。

前田普羅ゆかりの奥飛騨西茂住にある凡兆岩

俳人の普羅が訪れるのは当然ながら、登山家の烏水が強い関心を寄せたのは元々は旅行家の面目躍如というところである。

落ちていた案内板にはこうある。

〈県指定　史跡

加藤歩簫文字書岩（凡兆岩）

昭和三十五年三月三十日指定

芭蕉十哲の一人、凡兆（加賀の生れ）が元禄のはじめ越中から飛騨に入ろうとして道を中街道にとった

この街道は昔から難所として知られており、ようやくこの地まで来たが先に進むことができず、そのとき夕暮れ迫る渓谷の絶景に感動して「わしの巣の樟のかれ枝に日は入ぬ」の句を残して引き返したと伝えられる。

一八一六年（文化十三年）飛騨高山の国学者で俳人であった加藤歩簫が船津の俳人北沢桃逕を伴ってこの地を探り、山肌に露出した自然の大岩石に大書し彫刻させたものである。　平成四年十一月神岡町教育委員会〉

周囲は落葉樹林に囲まれている。秋の黄葉期は素晴らしいだろうが、誰でも来れるところではないのが残念である。

若年層対策に一提案

中世古隆司

私は毎朝、早朝ウォーキングとラジオ体操に近くの公園に出かける。そのとき出会う人たちは、山と同じく中高年者が多い。しかし公園の中のグランドでは小学生上級から中学生くらいの子どもたちが数人のおとなに導かれ、野球の練習をしている。そのおとなたちは、自分の果たせなかった夢を子どもたちに託しているのかどうかは知らないが、いずれにしろわが国最大のメジャーなスポーツである野球ですら、このようなおとながいて野球の普及に陰ながら努めている。ましてや3Kスポーツの代表のように思われている登山の団体である山岳会に若者が入らなくて困る、困ると何度唱えても若い会員は増えない。

そこで私はひとつの提案をしたい。それは、山岳会にジュニア会員制度を導入するというものだ。10歳以上18歳くらいまでをジュニア会員とし、入会金は無料、会費は通信費程度の少額とする。月に

1度くらいは近郊の低山に案内し、夏休みには日本アルプスの有名峰に案内する。そして励みになるように1年を通して全山参加者は表彰するぐらいのことがあってもよいであろう。少年は成長も早いので、指導者は老人のボランティアではダメで現役の登山家が望ましい。もちろんそれ相応な報酬を支払う。最近は職業ガイドもいるから、彼らを雇うのもよいであろう。時には安全な人工壁でクライミングも指導する。高校生くらいになれば実際の岩場へ案内するのもよいであろう。

そのためにも一般の山岳会や山岳部のように、幕営や登攀の共同装備も備えなければならない。こうして子どもの頃から山岳会に馴染めば、ジュニア会員卒業後もそのうちの何パーセントかは本会員に進んでくれるであろう。

そしていずれは、「登山をするなら、日本山岳会へ入らないと損だ」というくらい山好きになるように、究極的にはたとえば、○○大学山岳部ではなく、日本山岳会○○大学支部となるくらいにまでなれば、この世に山があるかぎり日本山岳会は永遠に不滅である。

幸い、山岳会では「山の日」を制定しようとしている。「山の日」制定はジュニア会員制度を導入するには絶好の機会である。すなわち、「山の日」ができても、親や学校は危険を伴うことはとにかく避けたがる。そのような時、山岳会が子どもたちに「《安心安全な登山》のお手伝いをします」とマスコミを通じてPRするとよいであろう。

5300人以上の会員がいれば、なかには法人組織が何であれ、また会員の減少も成り行きに任せればよいと考える人がいても不思議ではない。しかし山岳会を永く存在させたい、あるいは登山というこの素晴らしいパフォーマンスをこれからの人々へも伝えたいと思う人は、とにかく何か行動を始めよう。

世界遺産キナバル山頂へ

藤田純江

若い頃から機会があったら行きたいと思っていたキナバル山に、岐阜支部の女性3名で7月21日から6日間の日程で出かけた。比較的楽な山という印象をもっていたが、60歳を過ぎた今では、そう簡単な山ではなかった。滞在中は日本語の話せる現地ガイドの世話になった。

22日早朝、キナバル登山口に向かった。登山手続きの後、山のポーター兼ガイドと私たち4人で出発。標高差約1500メートル、距離6キロ、急登であったがランをはじめ熱帯植物が豊富であるため、楽しみながら歩けた。いろいろな国の人たちとの挨拶も楽しい。6カ所の休憩所では、しっかり休んで呼吸を整えた。水は豊富でトイレは水洗、掃除も行き届いていた。約6時間かけて3300メートルの小屋に到着。小屋には世界各国の人が泊まっており、満員状態であった。若い人が多く、食事はバイキングでおいしかった。

23日朝2時15分出発、6時のご来光を目指す。階段の多い樹林帯の中の道をヘッドランプで照らしながら歩いた。しばらくすると一面平らな岩となり、ロープにつかまりながら登る。だんだんと高度が上がるにつれ呼吸が苦しくなってきた。牛歩で歩き通し、予定時刻でローズピークに登頂。4095メートルから見るご来光は最高だった。周りを見渡せばそそり立つ岩壁の群、圧倒された。抜けるような青い空に、運の強さを実感した。

帰りは長い長い下りである。小屋で朝食をとり、登山口に戻ったのは14時15分だった。実に12時間を要した。案内所で登頂証書をもらい感無量……、少し厳しいキナバル登山は終わった。

あとの2日間は、海と市内観光で過ごした。たくさんの人たちとふれ合い、マレーシアのことを少し理解できた素晴らしい旅であった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

第6回土曜懇話会

7月4日、104号室にて約50名の会員が集まり、赤沼健至会員の講演会が開かれた。

講演の前半は美しい山々のスライドを見ながら機知に富む山の大自然の美しさ・素晴らしさ、山小屋でのトイレや生ゴミ処理の苦労話、また山小屋経営の裏話など、実践的で臨場感のある話を聞き、後半は山岳史的に貴重な記録映画の上映と講演会となった。上映作品は、山岳映像作家でもある羽田栄治会員の監修によるものである。当日は羽田会員に映画の解説とともに近代登山幕開けの登山界や、山岳会の興味深いエピソードなどの話もしていただいた。

北アルプスの燕山荘三代目オーナーである赤沼氏の講演は、山小屋の主人の眼を通して見た実体験など具体的な内容の話で、参加者を飽きさせなかった。氏の自然や山小屋に対する考え方は明確で、登山者と接しながら四季を通して大自然の素晴らしさ、自然を愛する人、理解する人を増やしていくことであり、山小屋周辺の自然について紹介し、知る機会をたくさん作るように努めている。

かつて山小屋の付近や登山道にクマが出るようになり、数年かけて調査した結果、生ゴミを外に出していた事が主たる原因だと判明したので、その後山小屋と登山者が一切の生ゴミを外に出さないようにし、完全に山から下ろすようにした。何百万円もかけて業務用の生ゴミ処理機を投入したが、排出する煙の臭いがまたクマを呼び込んでしまい試行錯誤の連続であったが、生ゴミがなくなるとクマは出てこなくなった。クマは人間との接点がなくなり、自分の生息エリアに戻り、共存できるように野生動物や植物が生息しやすい環境を守るのは、私たち人間の務めである。

ゴミは完全に山から下ろすことが重要であり、山小屋も努力し、登山者も一人ひとりその事を守ってほしい。ゴミが出るとネズミが増え、それをねらったキツネが登ってくる。なかには人間がエサをくれると学習したキツネは、秋になると登山者が減るためにライチョウをねらい、ライチョウの数が少なくなる。人間の行動が生態系に影響を与える結果になる。

ゴミは持ち帰る。自然のものは自然のままにしておき、人間の手で変えるようなことはしない。野生動物にエサをあげない。これらのことは必ず守ってほしい。

自然を愛し、山を愛し、何よりも人との縁を大切にと訴えかける話ぶりに、また山小屋の現場からの経験談に皆、興味深く聞き入り、またお得意のアルペンホルンの演奏もあり大いに盛り上がる。

燕山荘が初代赤沼千尋さんによって創設された192 1年当時の当山岳会とのエピソードや、築後70年を経た燕山荘本館の大黒柱や太い梁がすべてボッカの手で運び上げられた建設当時の話、そのボッカ達の生きざまを見て、その後大いに奮起して山小屋の近代経営に役立てた話。近頃の登山者気質や優しい山の登り方のマニュアル、一本のグリーンロープでコマクサの大群落を燕岳で増殖させたこと、ライチョウが絶滅危惧種に指定されるに至った経過、自然保護、従業員教育の苦労など、ジョークやユーモアも交えての話は尽きず、参加者は大いに楽しんでいた。

（野崎和彦）

山の自然学研究会――

地球の脈動を感じるアイスランド11日間巡検報告

7月5日～15日、巡検旅行に参加した。5日、古田リーダー以下16名で成田を出発、コペンハーゲンに向け飛び立った。

6日、シンクヴェトリル国立公園ギャウ（大地の裂け目）、ゲイシール（間欠泉）、グトルフォス（黄金の滝）、黒い砂が覆う氷河ソルヘイムを訪ねる。キルキュバイヤルクロイストゥル泊。

7日、ヨークルサルーン氷河湖へ。水深最深部で284メートル、これは氷河の消耗域の重量と流れで削られたもので、氷河の厚さが300メートルあったという証拠であることが理解出来た。海水が混ざっているため、湖面は凍結しないとのことである。

8日、ラーカギーガルの火口群を訪ねる。この火山群は1783年6月、突然地面が割れて火が噴出し、やがて火のカーテンとなって夜空をこがした。ラーキ山に登ると南から北へ25キロ、灰色のクレーターが一直線に並んでいるのが見える。はるか島最大のヴァトナ氷河の下まで続く、凄まじい光景だ。夕方には、アイスランドの最高峰クヴァンナダールニュークル山（2119メートル）も見える。太陽はまだ高い。

フロイギュリの滝にて

9日、ラーキ火山から流れ出した広大な溶岩流を観察し、世界最大の噴火割れ目エルドギャウ探訪。ランドマンアロイガルの露天風呂を楽しむ。レイルバッキ泊。

10日、内陸ハイランドのスプレンギ砂原を右にヴァトナ氷河、左にホフス氷河を見ながら。ひたすら砂漠の中の国道26号線を北上し、宿泊先のロイガルへ。

11日、ミーヴァトン湖を目指す。ディムボルギル溶岩・グリョウタギャウは溶岩台地に出来た地割れで、最高の興味をそそるもの。クラプラ地熱発電所など地球の脈動を感じる。これらの展望台クバ登山を楽しむ。

12日、神々の大滝ゴーザフォスを見る。アイスランドの滝はどこも水量が多く7つ目の滝。島の北岸フィヨルドの美しい町アークレイリにより、ソイザルクロゥクルのホテルへ。

13日、島内陸部を南へ縦貫。左手にホフス氷河右手にラング氷河が巨大な姿を見せる。ヴェラベルの露天風呂は疲れを癒す楽しい湯だ。レイキャビークに戻り、市内見学。

14日、レイキャビーク空港から一路成田へ。15日、成田空港にて散会。

アイスランドはプレートの境界線が国土の真中を通りギャウが至る所にはしり、いつどこで噴火しても不思議ではない状態だという。過去のさまざまな痕跡があちこちに広がり、氷河から流れ出た滝の大きさと水量に驚かされた。北海道と四国を合わせた国土に人口は30万人、街はとても綺麗で住民も親切であった。

地熱を利用した発電と温水暖房で住み心地はよさそうだ。氷河湖の美しさは例えようもなく、氷塊が何年もかかって海へ出ていくのだということを知った。アイスランドで多く巡検したギャウのありさま、柱状節理・黒い氷河の砂・卓状火山の成因。氷河の下での火山噴火のものすごさ、不思議さを観察した。これらは世界の他の地では経験できなかったことで、すごい収穫であった。

（小亀真知子、船橋　明）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

越後支部
第52回高頭祭開催

いっこうに梅雨明けの気配もみえない7月25日、今年もまた弥彦山大平で行なわれる高頭祭の日を迎えた。

高頭仁兵衛翁の寿像と武田久吉撰による頌文板を石にはめこんだ寿像碑が弥彦山頂に建立され、竣工式が行なわれたのが昭和25年7月2日。この日をもって第1回高頭祭となし、今日に及んでいる。

その間、山頂から大平園地への寿像碑移築や新潟地震など諸々の事情で中断を余儀なくされた年もあったが、その高頭祭も今年で52回を数える。

この日、碑前には越後支部会員のほか、首都圏、山梨、埼玉、秋田からも大勢の顔ぶれがそろい、例年にない賑わいをみせた。

本部からは宮下秀樹前会長、堂本暁子評議員、近藤信行元理事（山梨県立文学館長）も駆けつけていただいた。14時30分、田邊信行事務局長の司会で式が始まる。

恒例の神事は平田大六前支部長。神職さながら碑前に祝詞をあげ、玉串を捧げて厳粛のうちに終わる。

続いて山崎幸和支部長が、「かつてはわずか10名ほどの支部会員で開催したこともある高頭祭が、今年は100名を超える参加をみて、多くの方々が高頭祭に関心をもっていただいたことは、こういう喜びである」と謝辞を述べた。

続く来賓挨拶では宮下前会長から、日本山岳会が当面する公益法人制度改革への取り組み状況の説明と、「海の日」があってがないのはいかがなものか、と山の記念日づくりについて呼びかけがあった。

堂本評議員は、「国会議員や県知事を無事務められたのも、高校時代に登山を始めたおかげ。体力、判断力、山の仲間に支えられた。政界を引退した今、再び山に登ることができて嬉しい。これからも高頭祭をみなで守っていこう」と述べた。

最後に近藤元理事は、日本山岳会創立発起人の一人として財政面から会を支えた高頭翁の功績について讃えられた。

高頭祭を終え、碑前で集合写真を撮った一行は、17時から開催される松明登山祭に合流するため、ご神廟のある弥彦山頂へ移動した。かつて不定日開催であった高頭祭も、弥彦神社灯籠神事に協賛して行なわれる「弥彦山松明登山祭」と同時開催にしたことにより、昭和48年から7月25日と定められたのである。

長岡市深沢町にある高頭邸跡は、現在は河内公園となり、近くの正林寺にある「奥つ城」は苔むして人影もない。

来年の7月25日は日曜日にあたる。ぜひ、多くの会員からご参集願い、高頭翁の遺徳を偲んでいただきたい。

（高辻謙輔）

第52回高頭祭参加者の寄せ書き

年次晩餐会は「花の山」をテーマにしました

12月5日㈯、年次晩餐会を開催します。

今回は、会場を変え100周年記念祝賀会で使用した「飛天」です。恒例の「秩父宮記念山岳賞」受賞および受賞者による基調講演、海外基金登山隊の登山報告以外に、「花の山」をテーマに、各支部の魅力的な花の山をパネルで紹介します。また、高山植物の魅力を山岳写真、スケッチなどもあわせて展示します。ご期待ください。

（詳細は10月に送付します「晩餐会のご案内状」をご覧ください）

日　時　平成21年12月5日㈯

場　所　グランドプリンスホテル新高輪「飛天」　　**総務委員会**

追悼 OBITUARY

ネパール一途の川喜田さん

酒井敏明

川喜田二郎さんが半年ほど入院しておられると風の便りに聞き心配していたところ、7月8日、逝去されたとテレビニュースが伝えた。89歳であった。7月25日、墨田区千歳の西光寺における無宗教のお別れの会に参列した。

本会名誉会員川喜田二郎博士は三高、京大で登山と探検を学ばれ、すでに学生時代から南洋群島ポナペ島や中国東北の北部大興安嶺の探検に参加された。今西錦司博士を中心とする京大探検グループの俊秀である。

1953年第一次マナスル登山隊の学術班として農学者中尾佐助さんとともにネパールを広範囲に調査し、58年には西北ネパール学術調査隊を組織して野外研究者7人とともに長期滞在し、内容豊富で高密度の資料を大量に集めて帰国された。

このころ川喜田さんは京都に住み大阪市立大学に勤務しておられたので、山岳部部員または若手OBとして私たちはフィールドのかおり高いお話を聞き、教えを受け、また鼓舞された。「チベット・ジロー」は野外学者であり、熱血漢であり、また扇動者であった。

2回の探検行の成果は多くの学術論文になり、英文報告書も刊行されたが、一般向けに『ネパール王国探検記』、『鳥葬の国』の2冊の書籍が発売され、ともにベストセラーになった。

ネパール北辺のチベット民族の生活と文化に深い学問的関心を持たれ、精力的にヒマラヤ地域の文化人類学的研究を進められた。チベット文明に対する中国政府の弾圧を強く批判攻撃する姿勢は終生変わることがなかった。

川喜田さんは野外調査で集めた膨大な資料をカード化し、多くのカードから共通点や関連性を見出す情報の整理学を体系化し、KJ法として67年に発表した。これを一般社会、企業人にひろめる活動を展開し、のちにKJ法学会を設立した。

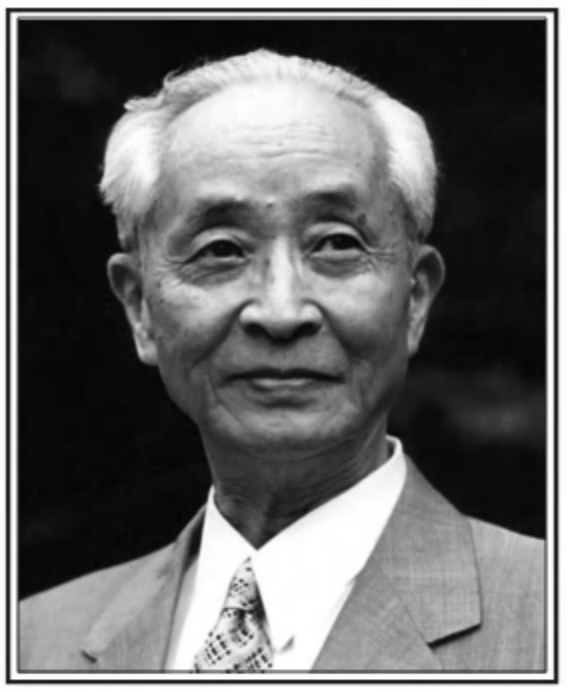
ネパールをたびたび訪問されたが、ネパール人留学生受け入れを契機に日本ネパール文化協会を設立、自ら長年にわたり専務理事、のちに会長として協会を運営し、両国の文化交流に精力を傾注された。ヒマラヤ地域住民の暮らしの向上のために、村人自身の参与と工夫の必要性を説き、軽架線と簡易水道などをボランティアとして建設する実践活動を指導した。

1969年の大学紛争に際して東京工業大学を辞し、移動大学を始めた。公募した百余名の参加者たちと2週間、問題解決学の実地研修をするユニークなアイデアで、企画者、行動人としての川喜田さんの面目躍如たるものがある。

川喜田さんが提唱実践された民間レベルの国際支援事業は高い評価を受け、ネパール政府の2度の勲章、マグサイサイ賞、秩父宮記念学術賞など受賞しておられる。

京都大学学士山岳会の有志の集まりアンチョコ会に最後に参加されたのは2003年8月、奥吉野五色湯旅館での集いであった。駐車場から日出ヶ岳頂上まで登りはわずかであったが、体力の衰えが激しかった川喜田さんは喜美子奥様とごいっしょに、休み休みではあったが三角点まで歩きとおされた。これが山歩きの仕納めと心に秘めておられたのであろうか。

謹んでご冥福を祈ります。



川喜田二郎（かわきた・じろう）
日本山岳会名誉会員。会員番号4042。1920年5月11日、三重県津市生まれ、京都府立第一中学校、第三高等学校（理科）卒業。1941年4月、京都帝国大学（文学部）入学、43年9月、卒業。1944年2月、陸軍に入隊し、終戦とともに除隊。のちに大阪市立大学、東京工業大学教授。1970年4月、川喜田研究所を設立し、所長に就任。その後も、筑波大学、中部大学で教鞭をとる。2009年7月8日、敗血症のため逝去。享年89。著書に『川喜田二郎著作集』（1～13巻、別巻、中央公論社）ほか多数。

図書紹介

『山をたのしむ』

梅棹忠夫・著

2009年7月
山と溪谷社刊
四六判　368ページ
定価　2940円

いままさに、「知の最先端」を歩む著作である。

「楽しむ」と漢字を用いずに、ただ「たのしむ」とした、穏やかな、悠揚せまらぬ題名の著作なのに、おそるべき知的な刺激が、ぼくの精神の首根っこをムンズとつかまえて、揺さぶった。

何もかも、新しい。たとえば、「翌日は嵐が吹きあれて滞在、つぎの日に火口壁をよじのぼって稜線にでた。これからわれわれがおりてゆこうとしている白頭山の北面は、地平線まで見わたすかぎりの大森林だった。天池の水は火口壁の切れ目から噴出して滝となり、この大森林のなかに吸いこまれている。わたしたちは北面の急傾斜をくだって、川ぞいに北へと密林のなかの行進をはじめた」というくだりを読んだ瞬間、ぼくの眼前には大森林が広がり、こころは一行とともに、大密林のなかへとわけいってゆく気分になる。

69年も昔の、第二松花江の源流の確認という地理学上の発見につながる旅が、なまなましい臨場感をもって迫ってくる。

ここに集められた、いくつもの文章や、いろいろな場での発言の記録に、つねに満ちているのは、まさに生きいきとした臨場感なのだ。まことに幸せなワクワク感にひたることができるのだ。

日本山岳会名誉会員であり、滋賀県愛知郡湖東町にある「西堀栄三郎記念　探検の殿堂」に50人目の探検家、しかも「学術探検の巨人」として入った人と、時空を超えて、ともに歩み、考えることができる。

「オリジナルなものを出すということは、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考えて初めて出てくる」という行動原理から生まれた、あの『文明の生態史観』（1967年）は、「マルクス教」的な、歴史の単系的発展段階理論に染まっていた人びとに衝撃を与えた。ぼくごときヘナチョコ新聞記者の思考にも波は及んだ。

地球そのものも人類も、危機に直面しているいま、「地球上で人間がいかにそれぞれの環境に適応しつつ文明をつくりあげてきたか」というのが文明史なんです。そういう観点でやるべきなのです」という最近の発言は、あらためて現代世界を直撃している。

大峰山で修験道の「奥駆け」をやったり、1年のうち100日も山に入っていて2度も落第した話や、有名な山の歌『雪山讃歌』の由来のような、愉快なエピソードとともに、ごく自然体で語られる思考の道筋は、きわめてわかりやすく魅力的だ。

恩師、今西錦司先生の記念碑の除幕式のため、雨のなかを遠い山中まで仲間に支えられながら登った「巨人」は、「今西さんのレリーフをみたいとおもった。しかし目がみえないので、手でさわってたしかめようとおもった。草つきの急斜面をよじのぼって、岩の上部に出た」のである。

そこで「ひざまずいて手をのばすと……」というくだりから先をここに引用しようとすると、ぼくは万感胸に迫ってくる。あまりに感動的なので、あとはみなさんご自身で読んでください。

当然ながら「山の仲間たち」の「山をめぐる交遊録」は多彩である。このような「交遊」はすでに歴史遺産級だ。

「野外科学者としてきわめてすぐれた人物」であった中尾佐助さんのところで、「辛辣な批評家」であったこのひとの、「へへん」というせせら笑いが披露されていて興味深い。本で読んだ知識などふりまわしたりすると、「君はそれを自分でみたのか」と突っこまれ、「だれそれの本で読んだ」なんぞと答えると「へへん」とやられる。

ぼくはこのくだりを読んでから

あと、ことあるごとに、どこからかこの「へへん」が聞こえてくるような気がしてならない。「また知ったかぶりをやってるな」とでもいうように。まるで太宰治のあの「トカトントン」だ。

この著作によって、精神の首ねっこをつかまれたぼくはいま、新しい出発点に立ったのである。

（轡田隆史）

アルセーニエフ・著／田村俊介・訳
『タイガを通って』
――極東シホテ・アリニ山脈横断記

2009年6月
平凡社刊
全書判　246ページ
定価　2730円

19世紀後半、帝政ロシアがアジアに進出すると多くのすぐれた探検家が活躍した。それらの探検家たちは、高いヒューマニズムの精神と不撓不屈の探究心を持って、辺境の自然と人々の生活を世界の人々に紹介した。「デルスウ・ウザーラ」で日本人に最もよく知られたアルセーニエフもその一人である。

彼は日本海を隔てた対岸のロシア沿海地方に残された荒々しいが美しい自然と人間をこよなく愛し、探検旅行と著作を通してその魅力を私たちに伝えた人である。本書はそのアルセーニエフが1927年に実行した最後の大探検旅行の成果であり、短いが美しい11章からなる、失われていく自然と滅びゆく少数民族への挽歌である。

極東シベリアに最後まで前人未到の地として残された、シホテ・アリニ山脈の山中を行く困難な旅タイガに棲息する動物たちやさまざまな植物、シャーマニズムの儀式、少数民族との心温まる交流やとの貴重な出会いなどが詩情豊かで、ヒュマニスティックな筆致でつづられる。セイヨウハルニレ生「まだ人間に汚されていない原はれ林の太古からの住人」と表現さ河るし、「海から遠ざかり、トゥトを遡行して行くにつれ、まるで季節が引き戻されているかのよう、峠に近づいた時、早春に出会ったのである」といった美しい文章が続く。タイガに棲む動物や鳥類についての生き生きとした記述は、一読して長く忘れることができない。

深い樹林の特徴の見事な記述は、彼の著作の最もすぐれたものであり、彼の自然とそこに住む人々に対する公平で温かい視線は人の心をとらえてやまない。人跡未踏の密林に分け入る、山頂によじ登る、焚火のそばで日記をつける彼の姿が手に取るように見える。しかしついに10月10日、5つの分水嶺を越えてソヴェツカヤ・ガワニからハバロスクまでの延長1873キロ、106日におよぶ彼の旅は終わるのである。

訳者はこの探検の地に実際に赴き、タイガを経験しているので、訳文は適切で過不足がなく熟れている。そして平明なようで変化に富む文章を読みすすむうちに、私たちはこの探検隊の一員として同行しているような臨場感に満たされるのである。

東洋文庫には登山者として読むべき本は多いが、長谷川四郎の『デルスウ・ウザーラ』に加えてさらによき1冊が加わったと言えよう。現代のシホテ・アリニ山脈を知るには、むさしの・多摩・ハバロフスク協会編の『シベリア大自然』（東京新聞出版局）で、アルセーニエフ自身を知るには付録に訳者のまとめた小伝がある。（絹川祥夫）

図書受入報告（2009年8月）

著　者	書　　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
梅澤一雄	谷川岳遭難防止条例――世界初の登山規制	202p／20cm	上毛新聞社出版局	2003	八木原國明氏寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2009――2009年全日本山岳写真展作品集(撮影地図付)	209p／22cm	全日本山岳写真協会	2008	発行者寄贈
五十嶋一晃	山案内人　宇治長次郎	308p／21cm	桂書房	2009	著者寄贈
四手井綱英	四手井綱英が語るこれからの日本の森林づくり	173p／20cm	ナカニシヤ出版	2009	出版社寄贈
上田茂春(編)	烏山房蔵　山岳遭難関係文献、及び岳人の追悼・遺稿文献目録(第4集)	232p／26cm	烏山房	2009	購入

会務報告

■8月の理事会は夏休みのため休会でした。

ルーム日誌 8月

1日　三水会
3日　総務委員会　システムプロジェクト　緑爽会　アルパインスキークラブ
4日　図書委員会　01会
5日　常務理事会　集会委員会
6日　山岳地理クラブ
17日　学生部　みちのり山の会
18日　高尾の森づくりの会
19日　アルパインスケッチクラブ
20日　山岳研究所運営委員会　指導委員会　00会　アルパインスキークラブ
24日　つくも会
25日　図書管理委員会　01会
26日　総務委員会
　　インターネット小委員会
　　山の自然学研究会　ゆきわり会
　　自然保護委員会　海外委員会
　　麗山会
27日　会報編集委員会　山遊会
29日　土曜会

8月来室者346名

会員異動（8月）

物故

三ツ石清（1936）09・8・20
木村芳弘（11940）09・8・4
芝田　稔（13837）09・8・25
長通　元（14547）09・8・3

INFORMATION インフォメーション

◆第37回山岳史懇談会「京都大学学士山岳会（AACK）の歩み」

図書委員会

平井一正（神戸大学名誉教授）、斉藤清明（総合地球環境学研究所教授）両氏をお迎えし、AACKの歴史を語っていただきます。

日時　10月30日㈮18時30分より
場所　日本山岳会104号室
問合　三好まき子（TEL 090－8019－8601）
✉344mm@mbe.nifty.com）

◆土曜放談会　**土曜会**

日時　10月31日㈯15時～17時30分
場所　日本山岳会集会室
会費　1000円（酒肴あり）
問合　箕岡三穂（FAX 042－776－1788）
✉kjtc1937@theia.ocn.ne.jp）

◆カウアイ・マウイ島トレッキング　**集会委員会**

トレッキングと火山観光。
期間　2010年1月20日～27日
費用　約32万円（空港税・チャージ別）
締切　10月20日
申込&問合　三井吉由江（TEL&FAX 03－3451－5388）
✉mtsun@cyberoz.net）

◆第27回図書交換会の出品図書募集について　**図書委員会**

本年度も、2010年3月に図書交換会を開催します。本棚に眠っている山岳書をお寄せください。

出品図書は10月末日までに、会員番号と電話連絡先を明記して「日本山岳会・図書委員会」宛にお送りください。雑誌類は原則としてお断わりします。頒布価格は図書委員会に一任ください。特に希望がある場合はご連絡ください。

頒布が成立した場合は、価格の80パーセントを出品者にお返しします。

問合　三好まき子（TEL 090－8019－8601）
✉344mm@mbe.nifty.com）

植村冒険館

東京都板橋区蓮根２－21－５
TEL 03-3969-7421　FAX 03-5994-4916
URL：http//www.uemura-museum-tokyo.jp

MOUNTAIN MUSEUM
山の博物館訪問

入館料　無料
開館時間　10:00～18:00（展示室への入館は17：30まで）
休館日　毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）
交通機関　都営地下鉄三田線蓮根駅より徒歩５分

――冒険家・植村直己が暮らした板橋から冒険精神を伝える――

たったひとり、厳しい自然の中で行動を続けた冒険家・植村直己はその生涯をかけて人間の可能性に挑戦し続けました。どのような状況におかれても、人間らしい豊かな心で目標に向かって努力する彼の冒険精神。この「ウエムラ・スピリット」を永く後世に伝えてゆくため、平成４年に板橋区によって㈶植村記念財団が設立され、植村冒険館が開館しました。

２階の展示室では、植村直己の冒険を紹介する企画展示を行なっています。年３回テーマを変えており、冒険で使用した装備をはじめ、彼自身が撮影した写真を展示。毎年２月には、最後の冒険になってしまったマッキンリー登山を紹介するメモリアル展を開催しています。マッキンリー山中で発見された最後の装備と日記、山頂に残されていた旗を展示しています。

１階の情報コーナーは「冒険図書館」です。冒険・探険、登山、アウトドアに関する図書を集めており、蔵書数は約6,000冊。蔵書数では日本山岳会の図書ルームには到底かないませんが、原則として開架式になっているので、気軽にご利用いただけます。また、『山と渓谷』『岳人』『ビーパル』など老舗アウトドア雑誌のバックナンバーも充実していますので、本棚から本を探すのがお好きな方にはきっとご満足いただけると思います。

このほか、『アドベンチャー・フォーラム』の発行（年３回）や、オリジナルグッズの販売、小中高校生を対象にした野外体験事業として自然塾、一般向けのアドベンチャー講座を行なっています。

新入会員オリエンテーション開催

２００８年９月～２００９年８月入会者を対象に、少しでも早く当会に慣れ親しんでいただき、活動の足掛かりとして利用していただけるようオリエンテーションを開催します。当会の活動状況、委員会や同好会の紹介、図書室、ホームページの活用、グッズ販売などの案内もいたします。これから始まるクラブライフを楽しく過ごすためにもぜひご参加ください。

期日は11月７日㈯13時半、日本山岳会ルーム（東京・市谷）詳細は別途ご案内します。**総務委員会**

■訂正とお詫び

８月（７７１）号、15ページ１段３行目、『山岳無尽蔵』は『山水無尽蔵』に、６行目、「日本人初」は誤りでした。また17ページ４段、新入会員１４６３５「清原淳子」は「清原純子」の誤りでした。ともに訂正してお詫びします。

日本山岳会会報　山　772号

2009年（平成21年）９月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上　昇
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社